道程

西東京市立ひばりが丘中学校
第３学年
第２９号
令和７年１０月３０日発行

今回はＣ組の合唱祭の作文を紹介します。

「ありがとう」　　３C

１０月１７日、最後の合唱祭を終えた。体育館から戻る、みんなの顔は様々で、嬉しそうにしている人も悔しそうな人もいた。でも、みんなの心の中に、悔いはなかったと思う。

私たちＣ組は、初めから運に見放されていたように感じた。授業で『群青』のパート練習をしても、集中力に欠け、曲を全く理解できず、練習のレベルはとても低かった。そこに畳みかけるように、自由曲選曲抽選に外れ、第１希望曲を選べず、最終的に決まった自由曲は、最高難易度の『はじまり』だった。

課題曲も不安定なのに、こんな難しい曲を歌えるのか。私は非常に不安になった。そしてその不安は、現実となった。『はじまり』の最初のパート練習、私たちは全く音が取れず、元の音源の原型をとどめないほど、ぐちゃぐちゃな歌声だった。この時に危機感を覚えたのは、きっと私だけではないはずだ。すると、パートリーダーが必死に呼びかけ始めた、リーダーの熱い思いが届いたのか、今までふざけ合っていた人達も、次第に変わってきた。いつの間にか、ふざけずに集中して歌い始めたのだ。その姿を見て私も「やらなきゃ」という気持ちになり、今まで以上に練習に積極的に取り組むようになっていった。男声パートの完成度は、みるみるうちに上がり、最初とは比べ物にならないほどになった。それに呼応するかのごとく、女声パートも完成度を上げていき、男声にかき消されていた歌声も、逆に男声を圧倒させるような迫力を増していった。

合唱祭の結果は、惜敗だった。私はとても悔しかったが、今までで最高の歌を届けられた気がして、後悔はなく、清々しい気持ちになった。

クラス全員がまとまり、ひとつになったからこそ、今までで一番の合唱を作り上げることができたと思う。みんなをまとめ上げたパートリーダー、伴奏者、指揮者、文化行事委員、そして、最後の合唱祭を最高の思い出にしてくれたクラスメイトに、私はありがとうと伝えたい。

「最後の合唱祭」　　3C

中学校最後の合唱祭、残念ながら入賞できなかった。三年間の締めくくりとして臨んだ行事だったから、悔しさが残った。

練習の最初の頃は、声も弱く、まとまりが余りなかった。正直、「本当に大丈夫かな」と思う時もあったけれど、たくさん練習するほどに、クラス全体の雰囲気が変わっていった。音程を確認したり、パートごとの課題も、リーダーが中心となったりして改善していった。私は文化行事委員として、クラスの変化が良くわかった。裏方の立場だからこそ、皆の努力の積み重ねが実感できたのだと思う。

合唱祭本番、体育館いっぱいにクラスの歌声が響き渡り、これまでの頑張りをひとつの形にすることができた。

クラスで協力して頑張ってきたからこそ、悔しい思いもしたけれど、当日のＣ組の合唱は今までで一番素晴らしい歌声だった、私の中では一等賞だ、と思っている。全員で一つの目標に向かって取り組んだ時間が、結果以上に価値があるものだった。この経験を通して、努力を重ねる大切さを改めて感じた。

中学校生活最後の合唱祭、Ｃ組のみんなと楽しく歌えて本当に良かったと思う。

『私たちの「はじまり」』　　3C

今回の合唱祭を通し、私の心に一番残ったことは、「全員が心をひとつにすることができた」ということです。

普段、仲が良い人と話すことはあっても、すべての人と関わる機会は、なかなかありません。でも合唱練習ではソプラノ、アルト、男声、というパートに分かれ、普段と異なるグループで活動することを重ねることで、いつしか「まとまり」が生まれてきました。

パート練習を始めた頃は、思うように上達できなかったり、音が取れず苦労したりしました。リーダーとして「的確な指示ができているのか」と責任の重さを感じることも多々ありました。だから、少しずつ団結力が上がり、声量も上がってきたときは本当に嬉しかったです。クラス練習が始まった頃は、特に合唱曲「はじまり」を歌っていると、気持ちが焦り、速度が上がってしまい、とても苦労しました。それを克服するために、緊張しないくらいの自信をもてるように練習を重ねることができて、とても良かったと思います。

だから本番当日、今まで歌に自信をもてなかった人も、ふざけがちな人も、体育館の舞台で「心をひとつにして歌うこと」ができたのだと思います。一生懸命に、真剣に歌い切ることができて、本当に良かったと思います。

この経験を通し、これからもＣ組がクラス一丸となり、受験を乗り越え、残された中学校生活を有意義に過ごせるようにしたいです。卒業までに残された月日を、どれだけ戦い抜くか、勝負だと思います。あきらめない強い心で、一緒に頑張りたいです。